

人新世を耕す

帯広畜産大学 筒木潔名誉教授

# 一夜で失われる作土

## 日本は海外の農地を消費

土壌の深さは地球全体で平均すれば18cmしかない、非常に壊れやすくて、人間の土への関わり方がより活発になるに伴って、土壌の荒廃が著しくなってきた。

土壌の深さは地球全体で平均すれば18cmしかない、非常に壊れやすくて、人間の土への関わり方がより活発になるに伴って、土壌の荒廃が著しくなってきた。

また、群馬県嬬恋村のキャベツ畑において作土の厚さを計測したところ1979年に35cmあった作土が、1984年に28cm、1989年に22cm、1994年に18cmにまで減少していた。多くの洪水や土砂災害では18cm程度の作土は一夜にして失

世界の全農耕地面積約15億ha(穀物収穫面積6.7億ha)のうち25%がこれらの土壌劣化の影響を被っており、4.3億haが風食により、4.7億haが水による土壌侵食を受けている。

よって土壌が失われる速度はこれよりもはるかに速い。アメリカ合衆国中部の農地では毎年2mm以上の農地土壌が土壌侵食により失われている。これは90年で作土が失われる速さである。

また、群馬県嬬恋村のキャベツ畑において作土の厚さを計測したところ1979年に35cmあった作土が、1984年に28cm、1989年に22cm、1994年に18cmにまで減少していた。多くの洪水や土砂災害では18cm程度の作土は一夜にして失

その例としては、土壌肥沃度の低下、酸性化、土壌汚染、土壌侵食、表土流出、乾燥化、砂漠化、塩類集積、アルカリ土壌

機構としては、母岩の風化、水による新しい土壌の運搬堆積、火山灰やレスの風積などが考えられるが、アメリカの農務省は2.5cmの土が作られるためには100年から500年が必要と見積もっている。すなわち18cmの土は720年から3600年をかけて作られたものである。

また、群馬県嬬恋村のキャベツ畑において作土の厚さを計測したところ1979年に35cmあった作土が、1984年に28cm、1989年に22cm、1994年に18cmにまで減少していた。多くの洪水や土砂災害では18cm程度の作土は一夜にして失

2.5cmを100年

高原の畑で土壌侵食

日本の高原・丘陵地の畑では極端な土壌侵食が記録されている。岐阜県

表土が新たに作られる

しかし、風食や水食に

度



傾斜方向に土壌侵食が進ん北海道・富良野町の傾斜地につくられたデントコーン畑（2006年7月著者撮影）

は激しい雨が多量に降り、しかも地形も急峻なので土壌侵食の危険度は非常に高いと言える。

### 回復困難な転換農地

さらに、近年日本の農耕地面積は著しく減少しその農地としての回復は困難な状態である。肥沃な農耕地が失われるということは、荒廃以上に深刻なことではないだろうか。

いったん畑地に転換した水田は、水分保持能力の低下などから再び水田として利用することは困難である。住宅地や他の産業用に転換された土地を再び農耕地に戻すことはさらに困難である。農耕地が失われるというこ

とは、農業者とその営農知識および経験が失われることであり、農業の復興が困難となる。

また、日本は不足する

食料を海外からの輸入によって補っており、日本の農耕地面積の約2倍に相当する海外の農地が日本で消費される食料を生産するために使われている。そしてこれらの海外の農地で土壌荒廃が進んでいる。

気候変動も食料生産の不安定性に拍車をかけている。世界の食料生産と国際関係が不安定な状況において、お金さえ払えば日本人が必要とする食料をいつでも輸入できるとは限らない。2〜3年の異常気象や国際不安が

発生すれば、国民が飢えに瀕することは目に見えている。

### 国内木材は不採算

森林についても同様に日本の森林面積はそれほど減っていない。このことの背景としては、海外からの木材製品の輸入が日本国内の森林の減少を抑制しているという現実がある。

他方、面積が減少していないかたわらで、国内の林業は不採算となり、森林の管理が行き届かず、放置された森林が増えている。また日本が木材製品を海外から輸入することによって、海外の森林の減少と荒廃が促進されている。

われる。

土壌侵食の速度には年

間降水量や土地の傾斜度  
が関わっている。日本で